

聖グロ戦記

キームン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界大会の誘致し、優雅な戦車道を目指した聖グロOG。まずは、全国大会優勝を目指し現場の声を聞くことに。新車両の導入準備やら優秀な生徒獲得を進め、ダージリン、ウバそれと私、キームン。の優秀な三人が入学したのだが…。

目次

三羽鳥は、お馬鹿トリオ

—
1

三羽鳥は、お馬鹿トリオ

「私が車長席だと思うのですが？」

金髪のギブソンタツクの少女。ダーズリンがいう。この場面で格言なんて出そうものなら顔面に右ストレートをお見舞いしようと思つていたのでそうならず済んで良かったと思つた。

「私が車長席にびつたりだろう。なあ、キームン」

ピンクの髪を三つ編みにした少女。ウバが私に問う。少し男っぽくてファンクラブまで出来つつあるのだが、本人は知らないしファンクラブの会長が私だということは絶対に秘密だ。

「バレンタインと同じでいいと思いませんか？」

黒髪ツインテールで、他の二人より可愛い少女が私、キームンだ。可愛い上に性格も家柄も格上の私が一番異性にモテる。と心の片隅で思つている。

「キームンの意見は最もだが、やはり私に任せて貰えないだろうか？」

「キームンは、私の味方よ。二対一で私が車長席よ」

「私の意見無視しないで欲しいのですが」

ギヤハハと淑女らしくない笑いが聞こえた。この場にいる唯一の上級生であるアルグレイ様だ。相変わらずカベナンターの砲塔に座り込んでいる。

「あー面白い。早くしないと日が暮れちゃうよ。それとキームンは監督不行き届きで減給処分だから」

カベナンターに乗らなきや帰れません。をやらなきやいけないのに、その前段階で躓いているのだアルグレイ様に雇われた事実は無いのだが、やはり私が主犯だと思われるにゃないか。

アルグレイ様が、「車長席は操縦席より暑さがマシになる」

なんて、言い出すしたのだ。アルグレイ様が、こんな事を言い出すのはいつもの事だが、この二人が踊るのは珍しい。私はただ適当にのつて一周回るだけのこの罰をさつさと終わらせたいだけだ。

それは4日程前のこと聖グロの無駄に豪華な学食（超高級レストランみたいなど形容詞を付けた位な場所）でお昼を食べていた。

「ダージリンもウバも次の紅白戦でないんだ」

「あら、キームンもそうなの」

「二人もなのか」

今度の週末にある一年のみの紅白戦の話になった。私はダーズリンとウバが両組の隊長だと思っていた。そして残りの二人も同様に二人が両組の隊長だと思っていたようだ。後で知ったのだが隊長はディンブラとプールの二人だった。

「我々の実力を見せつけるべきではないか？」

「面白くないという意見には賛成ね」

「じゃあセイロン様かアールグレイ様に掛け合わなくてはいけませんわ」

セイロン様というのは、聖グロリアーナ戦車隊隊長なのだが、生まれつき体が弱く入学してから7度も会っていない先輩なのだ。普段はアールグレイ様が隊長代理としてアレコレと指示してくる。

「それは反対ですわ」

「私もだ」

「せめてアールグレイ様に話を通してからの方がよろしいと思いますが」

ダーズリンとウバは時々団結する。いつもは喧嘩とか言い争いをしているのだが、持ち前の負けん気から共闘を選んだ時、私じや制御出来ない程の大きな岩となり転がり落ちていくのを待つことになる。本当に私の話を聞かなくなる。

「3人乗りですと、クルセイダーやバレンタイン等があるがどうする？」

「クルセイダーは試合に出る可能性が高いですし、ここはバレンタイン一択ですわ」

「なら私は操縦手をやろう」

「でしたら装填手をやりますわ。キームンは車長兼砲手ですわ」

「え？私が主犯っぽくなってませんか？ダージリン？ウバ？」

「気のせい（ですわ）」

入学当初から期待され、三羽鳥と持て囃され三大銘茶のティーネームを貰ったが、二人のお目付け役のようなポジションになり貧乏くじばかり引かされてきた。今日こそはガツンと報連相を叩きこんで私の苦勞を軽減します。

「ダージリンにウバも報連相って知ってます？」

「野菜ですわ」

「そうだな。なんだ？食べたいのならそういえばいいのに」

ほうれん草のお浸しを食べさせようとする天然お嬢様。リアルあーんを経験するとは思わなかった。美味しいが、私が頼んだサンドイツチセットには余り合わないようだ。だが、ウバのBセットボルシチにお浸しにナン。味覚・組み合わせがイギリスベール！

「あら、胡麻和えも食べさせてあげますわ」

食べるけど、サンドイツチとは以下略！ダージリンが今日食べてるのはSセット。数量限定のスペシャルなセットなのだが、今日は琉球料理のようだ。ゴーヤーチャンプ

ルーにチラガームズクの酢の物等々。ほうれん草が異彩を放つレベル。謎ののほうれん草押し！

「お浸しと胡麻和えどちらが美味しかった」

「お浸しの方が美味しいだろう」

はあ？笑顔で何言ってるの？ダージリンの馬鹿。ウバも何だかんだで乗っちゃったし。本当にめんどくさいぞ。聞かなかつた振りして最後のサンドイッチをパクリ。

「ほうれん草だし」

パンとほうれん草とジャム。イチゴじゃなく柑橘系のジャム。何なの？嫌がらせ？殺意湧くレベルじゃん。栄養士とか本当にいるの？もしかしたらマーマレードかも。つてそつちもダメじゃん

「ん？サンドイッチにほうれん草か。美味しそうだな。少し分けてくれ」

「そうですわね。私も貰いますわ」

ほうれん草サンドイッチが一番美味しいということに落ち着いた。めでたしめでたし。ほうれん草シヨックで忘れていた4日後の紅白戦は、バレンティン乱入事件と永らく語られることになる。おひたしおひたし。